川上 高司 ブログ アーカイヴ

2014年

1月5日

シリアとイラクの今後

シリア和平会議は 1 月 22 日に開催される予定である。すでにアサド大統領は出席の意向を示しているが、反政府側は本当に出席するのかどうかは当日にならないとわからない。シリア問題の解決に向けて少しでも前進することを願うばかりである。

シリアでは、アルカイーダと繋がりのある過激派組織と、過激派組織から離反しつつあるシリア人たちの反政府グループ、シーア派政権の政府軍の３つのグループが 睨み合っている。なかなか解決の糸口がつかめないのは周辺国と相互に影響しあっているからである。

その複雑なシリアと同じ構図で危機に瀕しているのがイラクである。シーア派が多いイラクの中で西部のアンバル地方はスンニ派が部族単位で居住している、スンニ派地域である。最近ではシリアの不安定な情勢の影響を受けて、アンバル地域にもアルカイーダと繋がりのある過激派組織が流入して急速に勢力を伸ばし、街を制圧している。

かつてイラクでは米軍の侵攻後、スンニ派とシーア派の熾烈な宗派闘争が勃発したがその最悪の時代に勝るとも劣らないほど昨年以来テロが頻発している。1 月 3 日には各地でテロが発生し多数の死傷者が出ている。

アンバル地域でも、過激派組織、スンニ派部族の武装グループ、シーア派政権の政府軍が衝突している。特にアルカイーダと繋がりのある過激派組織はシリアとイラクの国境付近にまたがって活動しており、イラクだけで解決できない点にマリキ首相は頭を悩ましている。もともとマリキ首相はアンバル地方にさほど関心がなく放置していたが、過激派組織が急激に勢力を伸ばしてきたのであわてて政府軍を投入した。しかしもともとスンニ派地域のためかえって複雑な情勢となっている。

アルカイーダはエジプトやイエメン、リビアでもじわじわと勢力を伸ばし進化しつつあると、元 CIA アナリストで対テロ対策の専門家のブルース・リードルは警告している。彼によればアルカイーダはアラブの春には出番がなかったが、その後の各国の民主化の挫折による真空状態にうまく入り込んだという。彼は今のアルカイーダを「アルカイーダ 3.0」と名付けた。そして第 4 世代のアルカイーダもやがて生まれてくると警告している。 無人爆撃だけのテロとの闘いはもはや限界に来ていると、オバマ大統領は現実を見るべきだろう。

1月7日

アルカイーダとイラン

イラクのアンバル地方では、アルカイーダと繋がりのあるスンニ派過激派組織が

勢力を伸ばし主要都市であるファルージャを支配下に収め、さらに支配地を拡大しつつある。マリキ首相は、アンバル地域のスンニ派指導者たちに政府軍とともにアルカイーダと闘うように要請した。

そのマリキ政府をバックアップするべくケリー国務長官は、アンバル地域の政府軍に対して軍需品の供給や軍事アドバイスといった軍事支援をすると表明した。ブッシュ政権がイラク侵攻後米軍と地元のスンニ派武装勢力は熾烈な戦闘を繰り返し、ファルージャの奪還には多くの犠牲を双方に強いた激戦地であった。今また軍事支援を口実にアメリカが介入するのではという憶測が生じるのは当然だが、ケリー長官はきっぱり派兵を否定している。

一方で、シーア派マリキ首相と近いイランはイラク政府軍の軍事支援を行う用意があると表明した。イランも、支援は軍需品やアドバイスにとどめ派兵はしないとしている。期せずしてイラクの危機にイランとアメリカが同じような対応を示していることは興味深い。アメリカにとってアルカイーダは今でも最大の敵である。またシーア派イランにとって、スンニ派過激派組織であるアルカイーダは敵である。宗派闘争は熾烈で昨年イラクでは一年間で 7000 人が犠牲となったと言われている。

昨年来のイランとアメリカの宥和路線を考えると、イランとアメリカはアルカイーダという共通の敵に対して今後共同歩調を採る可能性がある。そうなれば宥和路線はますます深化するに違いない。ただ、両国とも内部に抱えるタカ派や、サウジアラビア、イスラエルなど周辺国とどうバランスを取るかという難問にも直面する。ロハニ大統領とオバマ大統領がどこまで国内の抵抗勢力を抑えられるか、に両国の外交はかかっている。

そしてイラクの問題はシリアの内戦の問題にも影響を与える。ケリー国務長官は 1 月 22 日のシリア和平会議にイランを招待した。イランの返事は定かではないが、今年はイランとアメリカの今後を定める重要な年となりそうである。

1月8日

ソチオリンピック成功の鍵ーロシア特殊部隊「スペッツナツ」

いよいよソチオリンピックが迫ってきた。プーチン大統領はロシアの威信を賭けて成功に導くに違いない。2013 年は「プーチンの年」と言われるほど外交で活躍したが、ソチオリンピックを成功させてさらに得点を稼ぎたいところだ。

だが、そのプーチン大統領の頭を悩ますのは国内問題だ。昨年 12 月末にはロシアでは２つのテロが起こった。テロの起こったロシア南部のボルゴグラード（かつてはスターリングラードと呼ばれた）はチェチェン共和国などがある北コーカサス地方に近い。

イスラム国家のチェチェン共和国は独立を求めてロシアと戦闘を繰り返してきた。そのためソチオリンピックが近づくにつれてプーチン大統領は気が気でないだろう。なにしろチェチェンの武装グループは「ソチオリンピック妨害」を公言してプーチン大統領に喧嘩を売ったのである。プーチン大統領は特殊任務部隊「スペッツナツ」をソチに投入してテロの制圧を図ろうとしている。その本気度は、プーチン大統領には 24 時間、ロシア一屈強な護衛が張り付いていることから伺える。

このロシアの「スペッツナツ」は、かつてチェチェン武装グループを標的として結成されたエリート部隊である。アメリカ海軍の特殊部隊「シールズ」のロシア版と

もいえ、イスラムテロに特化された高いスキルと忠誠心を持つ。彼らはかつてのチェチェン紛争で暗躍した凄腕で経験も豊富でテロに対しては厳しい。だから彼らはプーチン大統領に反感を持っている。なぜならば大統領がテロリストに対して「生ぬるい」からだという。彼らはテロリストに人権は認めない、徹底して制圧するのみ、というのが持論だ。ソチの対テロ対策の切り札とプーチン大統領が信頼するゆえんである。

ロシア政府は相当数の警官や軍を投入してソチの安全確保に努めるが、それでもテロリストを見つけるのは難しい。彼らは市民に混ざっており見分けることができないからだ。

国防総省はロシアに対して対テロ対策で協力を申し出ている。もしロシアがアメリカの申し出を受けるとすれば、国際社会という点からも対テロ対策という観点からも転換点となるかもしれない。単独でテロとの闘いを進めるオバマ政権にとって、イスラムテロと長年格闘してきたロシアの経験は貴重に違いない。そして米露がテロリズムを追放するために利害を超えて協力するならば、まさにオリンピックは「平和の祭典」名利に尽きるだろう。ソチオリンピックはそんな視点からみてもおもしろい。

1月16日

中東シンドローム－危機迫るイラク

イラクのマリキ首相はついに国際社会へ助けを求めた。イラク西部のアンバル地方をアルカイーダ系過激派組織が制圧、その勢力をじわじわと拡大しつつある。15日にはバグダッドでもシーア派居住地に近いところで自爆テロが続発、北部の街でも爆弾テロが起こっている。もはや犠牲者の数のカウントは意味がないほどに情勢は悪化しつつある。

この国家の危機にマリキ首相は「国際社会が黙って見ているだけならば闘いは続き、やがてテロリストの王国が生まれる」と世界に向かって悲痛な訴えをした。国連バン総長はマリキ首相に政治的にアンバル地方のスンニ派指導者たちと協力して対処するようにアドバイスを送ったが、マリキ首相は協力には消極的である。

イラクで猛威を振るっている過激派組織は ISIS または ISIL という。Islamic State in Iraq and Syria または Islamic State in Iraq and the Levant の頭文字をとったものである。イラクとシリアの国境にまたがってこの地域に厳格なスンニ派国家を樹立しようという目的を持ったグループである。シリアでも勢力を伸ばし、おなじアルカイーダ系グループのアル・ヌスラを凌駕していまではシリア内戦の主流となっている。 イラクではシーア派やシーア派政権よりのスンニ派を標的として冷酷な攻撃を続けている。

このイラクとシリアの国境地域にスンニ派国家が樹立されれば、シーア派であるイランやシリア、イラクにとっては大きな脅威となる。また、アルカイーダ系の組織の国家となればアメリカにとってもとうてい認めることができない。同じスンニ派であっても一線を画するクルド人自治区やトルコにとっても脅威となる。ロシアにとってもイスラム過激派国家はとうてい許容できない。イラクの危機は国際社会全体の問題となりつつある。

アメリカは軍事的な武器などの支援にとどまり派兵の意志はなく、情勢を静観している。だがこの ISIS の動きはシリア和平にも影響を与える。イラクから ISIS を追放すればシリアへと押し戻されてシリアの内戦が激化する懸念があるからだ。イラク問題もシリア内戦も単独では解決しないということだろう。

だが、希望もある。22 日にはシリア和平会議が開かれる。アメリカはイランとの核問題の交渉も進行中である。周辺国の協力を得られる環境は整いつつある。

オバマ大統領の中東政策は難しい舵取りを迫られている。イラク戦争の戦後はまだ終わっていないということを改めて思い知らされる。

1月18日

究極の選択を迫られるアメリカーアサドとアルカイーダのどちらを選ぶべきか

1 月 22 日にシリア和平会議「ジュネーブ２」が開催される。アサド大統領は早くから参加を宣言しているが、反体制側はまだ態度を決めかねている。17 日にトルコのイスタンブールで反体制連合が投票して決めることになっているが、シリア国民会議は参加が決定されたら連合から脱退すると表明しており、反体制側は足並みが揃わない。

内戦の様相も変わってきている。もともと民主化を求めて立ち上がったシリア自由軍は夢破れて戦意を喪失しつつあり、かわって主導権を握っているのがアルカイーダ系の過激派グループ、アル・ヌスラと ISIS である。とりわけ ISIS はイラク西部へも勢力を伸ばしており破竹の勢いである。このままいけば、シリアの内戦後はアルカイーダ系の国家となりかねない。

そんな危機感から欧米諸国も対応が変化しつつある。特にアメリカにしてみれば、アルカイーダ系の過激派が政権を握る国家が誕生することは許し難い。そのためオバマ政権では、以前はアサド大統領の退陣を要求していたがいまではアサド政権のほうがましだという考えが主流になりつつある。イラク大使を務めたベテラン外交官のライアン・クロッカーは「アサド大統領が一番ましな選択肢だ」と、政権の存続を主張している。サウジアラビアもイスラム過激派の台頭には強い懸念を持っている。周辺国も含めてシリアを過激派国家にしないようにしようというコンセンサスが国際社会に生まれつつあるようだ。

1 月 13 日にはケリー長官とラブロフ外相がパリで「ジュネーブ２」の打ち合わせをして入念な準備を整えつつある。ケリー長官は反政府グループに会議に出席するよう圧力をかけており、米露がシリア解決にかける意欲はなみなみならぬものがある。

もちろん「ジュネーブ２」でシリアの内戦は解決しない。だが国際社会が本気でシリア解決に取り組むという姿勢を示して過激派の台頭を封じ込めなくてはならない。イランとアメリカの宥和路線、米露の協調路線、イランとトルコの協調外交、シリアの人道問題など追い風が吹く今こそ踏み出す時なのだろう。

1月22日

シリアの混乱を象徴する「ジュネーブ2」
ーメンバーを巡る攻防から前へ進めない国際社会

17 日、シリア反政府連合はシリア和平会議「ジュネーブ２」へ出席することを決めた。そして国連バン総長は 19 日、イランを「ジュネーブ２」に招待した。イランも招待を受けて出席する意向を示していた。「ジュネーブ２」はシリア問題にむけて国際社会が本気で取り組む場となるはずだった。

だが、イランの参加にシリア反政府側もアメリカも難色を示した。イランが参加するならばジュネーブ２には出席しないと反政府側が反発、一方でロシアはイランの

参加を強く望んでおりバン国連総長は窮地に立たされた。

イランとアメリカの立場は根本的に異なる。アメリカや反政府側はアサド大統領の退陣と政権移行を求めている。一方のロシアやイランは少なくとも今後しばらくはアサド大統領の留任を主張する。そのため政権を手中におさめたい反政府側はイランの参加は絶対に認められないのである。アメリカは政権移行を容認することが参加の条件だとしていたが、イランは会議への参加は無条件だとつっぱねた。バン総長は結局アメリカの意向にしたがって招待撤回を決めた。会議のメンバーを巡ってのこの混乱は、シリア問題の困難さを象徴しているかのようだ。

だが、現地では内戦の激化で市民が疲弊している。アルカイーダ系でもっとも過激な ISIS（Islamic State of Iraq and Syria）、同じアルカイーダ系のアル・ヌスラ、サウジアラビアの支援を受けているイスラム戦線（Islamic Front）、 最も穏健なシリア自由軍（Free Syria Army）が主として相互に戦闘をしている。そこへシーア派組織ヒズボラの戦闘員が加わっているシリア政府軍が加わっているため戦闘は熾烈を極めている。

これ以上市民の犠牲も難民も増やさないためには,そして市民が普通の生活を取り戻すためには一刻も早い停戦が必要である。すでに停戦に入っている地域もあるが多くの地域はまだ戦闘が続いており、停戦後の権力を争う政治抗争をしている場合ではないのである。「ジュネーブ２」は、停戦を実現する場でなくてはならない。まず停戦に向かって国際社会は万難を排して取り組まなくてはならない。

現地から見れば今のジュネーブはあまりにも現実からかけ離れているに違いない。

1月25日

トルコの憂鬱ーシリア和平会議「ジュネーブ2」

1 月 22 日に始まったシリア和平会議「ジュネーブ２」はシリア内戦解決に向けてのほんの 1 歩にすぎない。それでも昨年 9 月には軍事力による介入を検討していたことを考えれば、外交による解決を目指すという明確な方針が確立したことは評価すべきであろう。

シリア問題は複雑である。政治的には、アサド政権を排除したい反政府側と政権を維持したいシリア政府が対立し、それぞれアサド大統領の排除を求めるアメリカと存続を求めるロシアが対立する。さらにスンニ派政権を樹立したいサウジアラビアとシーア派政権を維持したいイランの対立という 3 層で根深い対立が横たわる。

この妥協点のない 3 層の対立が続く隙をつくように現地では、アルカイーダ系の過激派組織 ISIS がイラクや周辺国を巻き込んで勢力を伸ばしている。ISIS は同じ反政府側の武装勢力のシリア自由軍やイスラム戦線をも標的として戦闘を熾烈にしている。そのため周辺国は過激派の拡大という脅威にさらされることになり、シリア問題が自国の問題になりつつある。

その目前に迫った脅威を防ごうとトルコはシリアとの国境を封鎖するようになった。国境のシリア側では ISIS とイスラム戦線の戦闘が激化し、そのあおりでアルカイーダ系の過激派が国内に流入してはたまらない。トルコはイスラム国家だが世俗主義をとり、イスラム色を薄めてきた。それが過激派にとっては許し難いと映る。さらにトルコはシリアの反政府勢力の拠点を提供してきた。彼らを狙ったテロが大都市でも起こりうるとなれば、国境で流入を防ぐしかない。

だが、国境を封鎖することは物資の流通も止まる。トルコからシリアへの救援物資も滞り、シリアからの難民も足止めされてしまいかねない。そうなればシリアの人道上の危機はさらに深まっていく。また、長い国境線を完全に封鎖することは不可能であろう。トルコの憂鬱は簡単には晴れそうにもない。

サウジアラビアでも過激派対策が始まっている。政府は若者がジハードのためシリアへ出向くことを禁じ、過激派グループへの送金を取り締まるようになった。さらに「リハビリセンター」を設けて、過激派思想に染まった若者の社会復帰に力を入れるという取り組みや就業支援も始めている。

イスラエルも過激派の台頭に神経をとがらせている。イスラエルはシリアで活動しているアルカイーダ系の戦闘員はいまでは少なくとも 3 万人と見積もっている。彼らの目標は今はアサド政権の転覆だが、その勢いがいつイスラエルに向かうかわからない。ゴラン高原をかかえるイスラエルにしてみれば、過激派よりアサドのほうがいいという結論になる。少なくとも今のアサド政権下ではゴラン高原は停戦が保たれているからだ。

シリアの周辺国は待ったなしの対応を迫られている。

1月31日

解決しないNSA問題ー不信感が募るメルケル首相

1 月 31 日、ケリー長官はドイツを訪れる。ミュンヘンで開かれる安全保障会議に出席するためである。もちろん、メルケル首相との会談も予定されている。ケリー長官は盗聴問題は終わったかのように振る舞うであろうが、メルケル首相は実はまだ怒っている。ドイツにとっては盗聴問題はまだ渦中のテーマなのである。しかしドイツ側は謝罪の言葉をケリーにはまったく期待していないという。公式な謝罪のないことがさらにメルケル首相を苛立たせている。

NSA によるドイツでの盗聴が暴露されてからケリーはアメリカとヨーロッパの「絆」を強調するようになった。ケリーは子ども時代をベルリンで過ごしており、ドイツは身近な国である。両国の関係が良好な方がいいに違いない。だが本人が考えているほどには歓迎されていないようである。メルケル首相は「盗聴問題に関してはアメリカとドイツでは天と地ほど認識に違いがある」といまだに憤懣やるかたないのである。

昨年にはドイツ議会は盗聴問題の証人としてロシアに亡命中のスノーデンを召喚しようとしてアメリカの不評を買った。召喚は実現しなかったが、議会では今度は検証するための特別委員会を設置する請願が提出されたという。ドイツはどこまでも徹底的に追及するつもりなのである。

ドイツでは新しくステインメイヤー外務大臣が就任し、ドイツの国際社会での役割を拡大したいと考えている。特にドイツ軍の任務を拡大し、国際社会に関与したいと考えている。メルケル首相や前任の外務大臣はドイツ軍の役割を最小限に抑える方針だったが、後任者は「日々発生する残虐な行為を見逃していいのか？」とより積極的である。フランスはアフリカのマリで展開している軍事行動の支援を求めているが、「フランスだけに軍事行動の重責を負わせたくない」とさっそく支援に前向きである。

もしドイツが本気で転換するならばそれはアメリカにとっては歓迎すべきことに違いない。オバマ政権はヨーロッパを牽引する役割をドイツに求めており、特に積極

的に軍事的な役割を果たして欲しいと期待してきた。ドイツが役割を拡大すれば、アメリカはますます役割を縮小していくことができる。ますます内向きになることができるのである。

　メルケル首相の不信感を払拭しドイツとの関係を良好にしておくことがアメリカの国益にかなうならばその努力をすべきだろう。